たアナルと内臓器官は既に快楽受信器官へと変貌を遂げていた。
淫らな改造を施された肉体がこのピストン攻撃に耐えられるはずなど無かった。
じゅぶんっ！　ずぬっんっ、じゅぶぅんっ!!
「はひぅっっ、はぐっっっっっ、く、ひゃぁっ！」
(おらかのらかぁ……ぐひゃぐひゃぁ……！)
内臓器官をもみくちゃにされる度に意識がピンク色に染め上げられるほどの激感が炸裂し、身体の芯から脳天までを突き抜ける。異常なまでの快感はシエラの身体を弓なりに反り返らせ、背も折れんばかりだ。
(こっ、こんらろ……こんらろ、れぇぇぇ……！)
だが、そんな快感地獄の中にあってもシエラの心は未だ折れていない。人を守るために、希望を守るためにギリギリで淫獄の縁に踏ん張り続けていた。
(折れられ、なひぃっ、折れたく、なひぃっ……！)
人間を守りたいという一途な強い心。それが強靭な精神力と生命力を与え続ける。淫欲にまみれながらもまだ抗おうとする戦女神の姿は神々しいまでに美しく、そして皮肉にも淫らだ。
その思いはマルグリットも同じようだった。
ゾクゾクするほどの痴態に淫夜の女王の股間も熱く潤み、指は既に割れ目の中へと潜り込んでいる。
「んはぁ……いいわ……堪らない……最高よ……！　抗い続けて？　戦い続けて？　牙の折れたつまらないメスなんかには成り下がらないで……！」
「いひっ！　ひっ！　……んく……ひぅ……！」
マルグリットの言いなりになっているわけではない。だが戦いたい。負けたくない、負けられない……！　だらしなく崩れてしまいそうな美貌を必死に引き締め、身体の中で暴れ狂う快楽の爆発に耐えて喘ぎ声をかみ殺す。それでも完全ではなく、食いしばった歯の端から涎がぽたぽたと垂れ落ちて、紅潮した戦女神の顔を淫らに彩った。
「そう、それよ、その視線！　あぁ、あなたがふきこぼす最高の蜜が待ちきれない……！　もう我慢できないわ。ちょっと早いけど、最後の下ごしらえに移りましょう！」
(らっ、らにぉ……お……おぉぉぉおあぁぁぁぁぁっっっっっっ!?)
内心の叫びが実際の声に変わるのには時間がかからなかった。
「んふわぁあああああああああああああーーーーーーーーーーーーーーーー!!!」
膣内と直腸で暴れ狂う触手が同時に濃厚な淫のエキスを秘めた精液を放ち始めたのである。膣の物はより激しく、そして内臓の中の物もそれに負けないぐらいの勢いで噴射する。　びゅるるるるるるるるっるるる！　どばどばどばどばぁぁぁ！
「ひやぁあああああああーーーーーーーー!!　りゃ、りゃめぇえええええーーーーー!!　ひゃけぇぇぇぇぇっっっっっ!!　ほんろうりひゃけりゃぅうううううう!!」
ぼんっ！　とシエラのお腹が更に大きく脹れあがった。もう妊婦腹などというレベルではない。破裂寸前にまで水を注ぎ込まれた水風船のような物である。しかもそれが全て強烈な媚薬効果を持つのだ。いかな戦女神とて正気を保てる物ではない。
限界を超えた精液は遂におへそからしみ出し、間歇泉のようにびゅるびゅると吹き出し始めた。
「ひゃぁぅぅぅっっっっっっぁぁぁっっ!?　れるぅ、れれるぅぅ!!」